Assembly 2017

乙 22 番テーブル　総評

文責：川崎（立教 4）

1. テーブルメンバー

堀（早稲田２）
角田（明学２）
川松（青学３）
柳（立教３）
内山（成蹊２）
小湊（立教２）
岩井（慶應２）
島（明治３）

2. 議論の流れ

《ASQ》

Narrowing によって、角田（明学２）の「脳死患者の同意なしに臓器移植を実行する」というオピニオンシートが選ばれた。そして ASQ では、OP の定義の確認に膨大な時間を割くこととなった。

まず Problem エリアでは、岩井（慶應２）による「人工臓器を含めるのか」という問いがあがった。その問い自体に対して様々な解釈と問いが生まれたが、OP は「岩井（慶應２）がアーギュメントをしたいなら、含める」と答えるに留まり、今日の臓器の定義はアーギュメントの有無に一任されることとなった。

Harm エリアでも川松（青学３）から人工臓器に関する問いが出た。「患者にとって通常の臓器と人工臓器の違いは何であるのか？」というものだった。OP は「長く生きることができるかどうか」と答えたが、川松（青学３）にとって納得のいく回答にはなっておらず、議論が停滞した。堀（早稲田２）の介入によって、川松（青学３）は s/m と solution にダウトがあることが分かり、現時点では人工臓器を定義に含んだまま、ダウトに関しては後で話すことになった。その後、堀（早稲田２）のカンファメーションによって今日の TG は

「通常の臓器によって人工臓器よりも長く生きたい」と考える TG であることが分かり、結果人工臓器は臓器の定義に含めないこととなった。

《Praca》

ここでは 2 つのアーギュメントが提示された。

① 柳（立教３）によるアーギュメント

今日の政策は日本政府による殺人であり、政府はそれを認めてはいけない、というものだった。角田（明学２）と堀（早稲田２）の QC によって検証が進められ、堀（早稲田２）による「AD をとるまでは OP の考え（BD=dead）に従って、コンパリで BD=dead or alive を結論づけよう」という S と、角田（明学２）による「killing による悪影響は政策の施行後に起こる問題だから DA として話そう」という S が示されたが、柳（立教３）の意図にそぐわないとして通ることはなかった。

その後堀（早稲田２）のカンファメーションによって柳（立教３）は「1.政府は人々の意志を尊重しなければならない　2.政府は殺人を犯してはならない」という 2 つの主張を持っていることが分かり、堀（早稲田２）がもう一度新たなロジックに書き換えて検証を行おうと呼びかけた。しかしそこで柳（立教３）が突如アーギュメントを下げ、脳死患者の DA として出すことを伝え、終了した。

② 岩井（慶應２）によるアーギュメント

今日の政策は m/pps に反しているため施行すべきではない、というものだった。ここは主に堀（早稲田２）の Q と反論で進んでいった。それは、「脳死患者と TG である患者を総合的に考えた時に、SQ でも APA でもある程度までは m/pps を達成しており、ある程度は達成することができない。つまり m/pps という観点で見た時に政策の施行前後で違いはみられない。」というものだった。m/pps の達成とは、「try」でいいのか「result」が必要なのか、という議論で停滞しかけたが、堀（早稲田２）のハンドリングと川松（青学３）のカンファメーションによって当初の堀（早稲田２）の反論に戻り、さらに彼の「m/pps の UQ がない上で、TG と脳死患者どちらを優先すべきかは、コンパリで結論付けることだ」という S が通り、終了した。

《Worka》

堀（早稲田２）によるアーギュメント

APA では病院の数が不足するため患者は臓器を得ることができない、というものだった。角田（明学２）や川松（青学３）の Q によって、「SQ でも足りていないのに APA ではさらに需要と供給の差が広がってしまい、臓器移植は増えることはない」という主張の概要を確認したところで議論が終了した。

3. 順位と選定理由

１位　堀（早稲田２）

混沌とするテーブルの中でただ一人最後まで諦めず議論を進めようとする姿勢があり、このテーブルにおける進行役を担っていたことを評価した。このテーブルでは議論の交通整理に終始しており、そのカンファメーションスキルは高く評価できた。少々スピード力や断言力に欠けるところがあり停滞する場面もあったが、今後のトリート・ハンドリング力の大きな伸び代を感じた。

２位　角田（明学２）

各アーギュメントの検証時における介入を評価した。ASQ を中心に全体を通して OP としてスタンスがぶれており混乱を招いたことは反省すべき点であるが、角田の強みであるアーギュメントにおけるトリート力は他の 2 年生と比べても高いと感じている。今後は次世代を担うディスカッサントとしてさらに練習に励んで欲しい。

３位　川松（青学３）

1 位、2 位に次ぐ介入量とカンファメーション力を評価した。川松の強みは一つ一つ確実に確認しながら進めていく丁寧さであり、このテーブルではもっとその強みを活かすことができたはずである。丁寧な介入が苦手な下級生は彼女から学べることは多いはずだ。今後はエデュケーターとしての活躍に期待する。

４位　岩井（慶應２）

アーギュメントによる論点の提示と、細かい Q やダウトなどの介入を評価し、4 位とす

る。m/pps という論点をテーブルの論点に落とし込むことができなかった点、自らアーギュメントをトリートすることができなかった点は惜しいところであったが、今後とも批判的思考をなくすことなくスキルを磨いて欲しい。

５位　柳（立教３）

いくつかの Q を評価した。アーギュメントは出していたが自分から下げて特に結論も得ずに終わってしまったことで、評価することができなかったのは惜しい点である。

６位　内山（成蹊２）

いくつか Q をしていたが、それが全て自分の理解のための Q であったこと、また他者に介入してもらうことによって回答をもらうことができていたという点から、6 位となった。

7 位　小湊（立教２）

介入がなかったためこの順位とした。

7 位　島（明治３）

介入がなかったためこの順位とした。